

〔第47回〕

# NCGG-R1 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

## 老いの入り“口”から全身の健康を考える

口腔疾患研究部

松下 健二 部長

2020年1月14日(火) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

“病は口より入り、禍いは口より出ず”ということわざがあるが、様々な毒物や病原微生物は食品や水の経口摂取により体内に入り、様々な病気を引き起こす。また、野生の動物にとって歯は生きていくために最も重要な臓器であり、歯の喪失は直ちに死に繋がる。ペンフィールドの脳地図では、大脳皮質の約半分の領域に口腔の運動や感覚が投影されていることが示されている。口腔は、“食べる”“話す”といった我々が生きていくための最も重要な機能を担っているが、脳の活動にも多大な影響を及ぼしているのである。したがって、口腔の老い、あるいは口腔機能の低下は、全身の健康を脅かす入り“口”となりえる。

老いの入り“口”の一つである、歯の喪失の最大の原因は歯周病である。歯周病は、中年期以降に発症率が急激に増加することから、歯周組織の加齢変化がその発症や進行に関わることが示唆されてきた。しかし、歯周組織の加齢変化と歯周病発症との関連性は全く明らかにされていない。現在我々は、老齢および若齢マウスの歯周組織の変化を分子生物学的、細胞生物学的に解析を行なっている。合わせて、歯周病発症の外因となる口腔細菌叢の変化についても検討している。今回のセミナーでは、現時点で得られているデータを総合して、老化に伴う宿主-寄生体相互作用の変化から歯周病の発症病理について解説する。合わせて、口腔細菌が認知症の病態形成に関わる機序について、脳小血管病の視点から考察したい。

座長：今井 剛

連絡先：副所長室(内線5002)